南琉球八重山語黒島東筋方言における目的語の無助詞

－談話資料を基に－

原田走一郎

長崎大学多文化社会学部・多文化社会学研究科『多文化社会研究』 2022年第８号　抜刷

南琉球八重山語黒島東筋方言における目的語の無助詞
－談話資料を基に－

長崎大学多文化社会学部　原田走一郎

1．はじめに

目的語標示の交替が観察されることはよく知られており、Differential Object Marking（DOM、示差的目的語標示）と呼ばれる（Malchukov and de Swart 2009、古賀 2015など）。東京方言をはじめ、日本語諸方言においても DOM は観察される（松田 2000、木部 2019など）。このことは一部の琉球諸語についても当てはまる。南琉球八重山語黒島東筋（あがりすじ）（方言では *aasun*）方言（以下、黒島方言とする）においても、以下のように目的語標示の交替が起こる。(1)は無助詞、(2)は＝*ba*、(3)は＝*ju* をとった場合である。

(1)　*gira*　　*koos-i*　　*kuu*
　　シャコガイ　　とる-indf　　来る.imp
　　「シャコガイをとってこい」

(2)　*unu*　　*pusu＝nu＝du*　　*uraari*　　*ki＝ba*　　*bur-i*
　　この　　人＝nom＝foc　　たくさん　　木＝ba　　折る-indf
　　「この人がたくさん木を折った」

(3)　*ki＝ju*　　*bi-u＝ra*
　　木＝ju　　植える-int＝sf
　　「木を植えようね」

このように、黒島方言においては目的語標示がない場合とある場合との交替のみならず、標示がある場合も＝*ba* と＝*ju* という２つの助詞の間での交替が生じる。

黒島方言が属する八重山語諸方言の記述に目を向けてみると、＝*ba*、＝*ju* という目的語標示を持つとされる方言は多くある。一方で、それらの研究においては目的語は無助詞であることが基本であるという記述が目立つ。たとえば、次のようなものである。詳細は２．２節において述べる。

(4)　Lawrence（2012：386）による鳩間方言に関する記述
Overt case marking of the object is optional. If marked, as is common, *-ba* is used, or, in literary style, *-ju*.

本論文は、無助詞、*=ju*、*=ba* という複雑な交替を示す八重山語の一方言である黒島方言の目的語標示のあり方を解明する一歩として、無助詞の場合に注目し、次の問いに答えようとするものである。

(5)　本研究で明らかにしたいこと
無助詞は黒島方言の目的語の標示として基本と言えるか。

本研究では、談話資料を用いた調査を行い、以下の結論を得た。

(6)　本研究の結論
黒島方言の目的語の標示は無助詞が基本であるとは言えない。

また、目的語が無助詞になる場合は、目的語と動詞が隣接する場合にほぼ限られるという結果も得られた。

ここで本論文の構成を述べる。まず２節において先行研究を概観する。続く３節では今回行った調査について述べ、４節で結果を述べる。５節ではまとめをし、今後の課題についてあわせて述べる。

なお、(1)のように目的語に助詞が後接しない状況については「ハダカ」「ゼロ格」など様々な呼称があるが（２節を参照のこと）、本論文では先行研究を引用する際を除いて「無助詞」と称する。

２．先行研究

本節では先行研究を概観する。まず、２．１節においては黒島方言に関する研究、続く２．２節においては他の八重山語諸方言に関する研究をまとめる。表記は先行研究のままである。したがって「ユ」「ju」「yu」など、ゆれがある。傍線等は省略した。

２．１．黒島方言に関する先行研究

黒島方言に関する先行研究はそもそもほぼ無いが、格助詞に関しては中松（1976）と野

原（2001）がある。それぞれまとめる。

中松（1976）においては、黒島方言の目的語は「Ø（ゼロ格）」か「wa(R)」で示されるとされている[1]。以下に例文を示す。

(7) ssaRkutuØ　hoR　「仕事をする」
(8) caR　wa　ciR　「茶をつぐ」

一方、野原（2001）においては、目的語は「ba」、「ju」で示されるとされる。例を示す。なお、同研究の調査対象者は黒島内の４つの集落の出身者のようである。集落間での差については言及がないが、念のため東筋の話者から得られたという例を以下に示す。

(9) ʔu:takanu　munuba　haike:　「大高の物を買って来た」
(10) nuttidu　vaju　naka　ʃija:　「どうして子供泣かすか」

これらの先行研究はまったく一致していない。簡単にまとめると次のようになる。ただし、野原（2001）は「八重山竹富町黒島方言の助詞」と銘打たれた論文であるので、無助詞は考慮されていない可能性がある。

(11) 黒島方言の先行研究ごとの目的語の標示
　中松（1976）:「Ø（ゼロ格）」、「wa(R)」
　野原（2001）:「ba」、「ju」

[1] 中松（1976）は、「竹富町黒島方言の助詞の形態と用法を中心にすえて、八重山方言の特性を具体的にあきらかにすることにつとめた。」とあるように竹富町黒島方言、つまり、本稿で主に扱う方言と同じ方言を対象にしているはずであるが、本稿の筆者が知っている黒島方言の姿と同研究で描かれる黒島方言の姿が相当異なっており、どう考えていいのか、整理がつかない。本研究の結果のとおり、筆者が知る限り目的語の標示で「wa(R)」というものは用いられないし、（７-８）で用いられている「ssaRkutu（仕事）」「hoR（する）」「caR（茶）」「ciR（つぐ）」はすべて聞いたことがない。「仕事」は「zaaku」、「する」は「siiru(n)」、「茶」は「saa」、「つぐ」は「sau(n)」というのが筆者の知っている語である。「インフォーマント、特に若い人と年配の人とのあいだに語形のゆれがみられることはいうまでもないことである。（中松 1976）」と注記されているのでインフォーマントが複数いたことはうかがい知れるが、どのような性質の人物であったのか記載がない。1968年に脱稿した論文であるということで、本稿の筆者が知っている黒島方言とは大きな世代差がある可能性があるため、急激な言語変化を遂げたのかもしれない。

2．2．他の八重山諸方言に関する先行研究

本節では、黒島方言以外の八重山諸方言に関する先行研究をまとめる。一言でまとめると、八重山諸方言の目的語標示は無助詞が基本であるとされていることが多いようである。そして、なんらかの条件のもとで＝*ba* もしくは＝*ju* が生起する、という記述が多い[2]。以下、八重山諸方言に関する記述を引用する。

⑿　Lawrence（2012：386）による鳩間方言に関する記述（⑷を再掲）
Overt case marking of the object is optional. If marked, as is common, -*ba* is used, or, in literary style, -*ju*.

⒀　西岡・小川（2011：27）による竹富方言に関する記述
（格助詞「ユ」について）連用修飾格で、動作の対象などを表す。ただし、はっきりと動作の対象と分かる場合には省略されることも多い。

⒁　宮良（1995：174）による石垣島中心部方言[3]に関する記述
八重山石垣方言を含む琉球方言では「対格」を標示する助詞を欠いている。（中略）目的語に後置された-yu や-ba は格標示とは無関係で、単に先行する名詞を強調する機能を持ち、随意的な要素である。

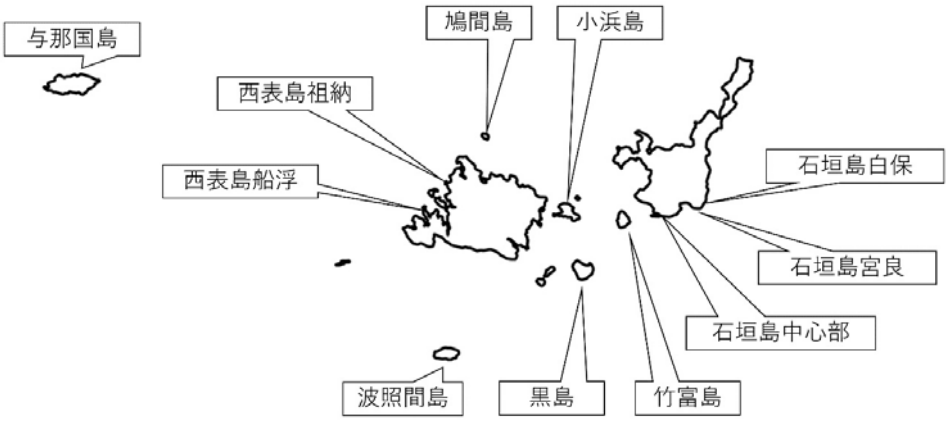

図　八重山地方の地図（白地図は freemap.jp より。筆者が編集した）

[2] 注意が必要なのは波照間方言である。波照間方言は主語の標示も目的語の標示も基本的には無いからである（Aso 2010）。例に挙げた八重山諸方言（黒島方言を含む）は、主に＝nu を主語の標示として用いる。西表島祖納方言のように＝nu を用いると「強調的（金田2009）」になるという方言もあるが、波照間方言は＝nu を欠くのである。つまり、その他の八重山諸方言は基本的には主格対格型言語と考えていいのであるが、波照間方言だけはS、A、P すべての標示を欠く中立型言語と考えられる。このように波照間方言は性質が異なるため、本稿ではとりあげない。

[3] 宮良（1995）が記述の対象とするのは石垣島の中心部である石垣、登野城（とのしろ）、新川（あらかわ）、大川の 4 集落、いわゆる四箇字（しかあざ）の方言である。

⑮　中川・ラウ・田窪（2016：40-41）による石垣島白保方言に関する記述
対格の標示は無標であることが多いが、*ju* で標示することもある。（中略）*ju* は、対格という関係性を明示するときや、対比（「ＡではなくＢを」）のときに使われると思われる。（中略）ただし、（中略）*ju* が常に対格を標示しているとは言えず、ＳやＡを標示している例も見られる。（中略）また、*ba* の形式も存在し、主に定（definite）の目的語に後続する。

⑯　伊豆山（2002：360）による石垣島宮良方言に関する記述
「を」相当の助詞 ju は、特別な時以外、現れない。（中略）格助詞「が」「を」双方の位置に現れる ba がある。これは du と共に出現することが多い。

⑰　金田（2009：36）による西表島祖納方言に関する記述
直接対象はハダカ格によってあらわされるのを基本とするが、指定・強調的な用法ではバを使用することで対格を明示しながら強調する。本土方言にもみられるこの助辞は、いわば対格専用の強調辞である。

⑱　占部（2018：57）による西表島船浮方言に関する記述
対格は＝*ba* と＝*ju* で標示する。（中略）また、目的語がどちらの標示も用いない場合も多く、これとの区別についても課題である。

一方で、目的語の標示に関して無助詞が多い、もしくは、無助詞が基本であると記述していないものもある。

⑲　野原（1999）による小浜方言に関する記述
格助詞 wa（動作・作用の目的、目標を表す）（中略）ba の変化したものである。
格助詞 ju（動作・作用の目的）

ただし、野原（1999）は上に述べた野原（2001）と同じく、「八重山竹富町小浜方言の助詞（１）」というタイトルの論文であり、そもそも無助詞が対象に含まれていないのかもしれない。

以上、見てきたとおり、八重山諸方言の研究においては、「目的語の標示は無助詞が基本である、もしくは、無助詞である場合が多い」との記述が多数派であることがわかる。本稿では、これが黒島方言にも当てはまるのか、談話資料を基に考えたい。

3．調査方法

本研究では、黒島方言の談話資料を用いて目的語の標示の有無の傾向を確認する。黒島方言には集落間で方言差がある（原田2016a：18-20）ものの、集落間での相互理解には問題がない。本研究ではまとまった談話資料が得られた東筋方言を対象とする。他の集落の状況については今後の課題である。

本研究で用いた談話資料は、2011年から2019年の間に収録、文字起こしされたものである。合計で110分ほどである。録音に参加してくださったのは1933年と1939年生まれの男性２名である。お二方とも黒島東筋出身で、外住歴はほぼ無い。資料は彼らの自由な会話とモノローグから成る。モノローグは昔話（桃太郎）の語りと島の集まりにおける挨拶であり、いずれも1939年生まれのかたによるものである。書き起こしに協力してくださったのは、1946年生まれの男性（仲本集落出身）である。

ここで、今回とりあげた目的語の判断基準を述べる[4]。

⑳　本調査でとりあげた目的語の基準

ａ．意味的に動作の対象、移動の経路などをあらわすいわゆる直接目的語をとりあげる。ただし、動詞の側で態の変更がある場合などはとりあげない。

例）「餌が食べられた」のようなものはとりあげない。

ｂ．黒島方言では軽動詞構文の名詞部分も＝*ba* をとりうるため、それもとりあげる。

例）「この問題を検討をして」のようなものは２つともとりあげる。

ｃ．目的語が主要部になる連体修飾構造の場合はとりあげない。

例）「さっき作った料理がなくなった」のような場合はとりあげない。

したがって、談話資料内に観察された次の例には＝*ba* が出現しているが、意味的に動作の対象と考えられないため今回の対象とはしない。*nz* は「出る」という意味の自動詞であり、「出す」という意味の他動詞ではない。

㉑　*ava＝ba*　　*nz-i*
　　油＝ba　　出る-indf
　　「油が出て」

[4] 本論文のもとになった発表（原田 2016b）においては *ai*「そう」という副詞を名詞と考えて目的語としてピックアップしていたが、それは誤りであった。本研究においては、*ai* はとりあげていない。

4．調査結果と考察

本研究の調査結果を述べる。まず、談話資料に現れたすべての目的語の標示を次の表1に示す。

表1　調査結果（すべて）

無助詞	78
＝*ba*	177
＝*ba*＝*a*（＝ba＝主題）	1
＝*ba*＝*du*（＝ba＝焦点）	11
＝*ba*＝*ju*（＝ba＝ju）	1
＝*ba*＝*du*＝*ka*（＝ba＝焦点＝不定）	1
＝*ju*	60
＝*ju*＝*a*（＝ju＝主題）	1
＝*ju*＝*du*（＝ju＝焦点）	4
＝*du*（＝焦点）	16
＝*a*（＝主題）	49
＝*n*（＝累加「も」）	47
その他	26
合計	472

以下、談話資料内で観察された無助詞、＝*ba*、＝*ju* の例を1つずつ示す。なお、「その他」[5]には、＝*tanka*（「だけ」）、＝*baaki*（「まで」）、1人称単数代名詞主題形（＝*banaa*「私は」）などが含まれる[6]。

[5] ＝*jun* という語形があるが、これは＝*n*「も」の異形態か＝*ju*＝*n*「をも」か判断が付かないため、今回はこれはすべて「その他」に入れた。

[6]「その他」に含めたものには次に述べるように興味深いものも見られた。まず、主題標示の二重使用である。これは *ureeja*（＝*uri*＝*a*＝*a*、（文字通りに訳すと）「これはは」）という例である。このような主題標示や焦点標示の二重使用は Lawrence（2012：399）や原田（2012）にも指摘があり、今後詳細な調査が必要であると思われる。また、*kutu* という現代標準日本語の「こと」に対応するものが目的語に後接する場合も1例見られた。これが後接したのは「おじいさん」を意味する人名詞であった。この例は *kutu* が助詞化しつつあることを示唆するともとらえられるため、興味深い。さらに、奪格助詞＝*hara*（「から」）、引用助詞＝*ti*（「と」）が目的語に後接する場合もそれぞれ1例観察された。これらの用法については今後、面接調査で詳細を明らかにしたい。なお、これら以外の「その他」に含めたものは＝*tanka*＝*du*（＝だけ＝焦点）と＝*tanak*＝*a*（＝だけ＝主題）がそれぞれ1例である。

(22) 無助詞の例

buntankin　　*accam-iru-n = ti = du*

分担金　　集める-npst-decl = quot = foc

「分担金を集めると言って」

(23) *= ba* の例

bici　　*isi = ba*　　*tur-i*

別の　　石 = ba　　取る-indf

「別の石を取って」

(24) *= ju* の例

junu　　*isi = ju*　　*tur-u-n = ti*　　*iz-i*

同じ　　石 = ju　　取る-npst-decl = quot　　言う-indf

「同じ石を取ろうとして」

今回の調査から、本研究では以下の結論を得た。

(25) 本研究の結論

a．中松（1976）の指摘する「wa(R)」は観察されなかった。

b．黒島方言の目的語の標示は無助詞が基本であるとは言えない。

c．目的語が無助詞になる場合は、目的語と動詞が隣接する場合にほぼ限られる。

以下、本節では、(25a) から (25c) についてそれぞれ述べ、最後に追加調査として他の八重山方言（石垣島登野城方言）との対照を行う。

まず、(25a) について述べる。2．1節でも述べたとおり、中松（1976）においては、黒島方言の目的語標示として「wa(R)」というものが格助詞としてあげられているが、本調査ではこれは確認されなかった。一方、同じく中松（1976）が指摘した「Ø（ゼロ格）」と、野原（2001）が指摘した「ba」と「ju」は確認された。

続いて、(25b) について述べる。2．2節で見たとおり、黒島方言以外の八重山諸方言の記述においては、目的語標示は無助詞が基本である、もしくは無助詞の場合が多い、とするものが支配的である。しかし、本調査の結果からは、黒島方言についてはそうは言えない。先に示した表1は、今回対象にした目的語の標示をすべてリストアップしたものであるが、合計472例の目的語のうち無助詞であったのは78例と、約17%だけである。ただし、この割合の分母には、焦点助詞 = *du* や主題助詞 = *a* が後続したものも含まれている。

これらの助詞は、表にも示したとおり＝*ba* や＝*ju* のあとにも後続しうるので、無助詞、＝*ba*、＝*ju* の後になにも後接しないものだけを改めて比べてみよう。

表 2　焦点助詞などが続かない場合のみの数と割合

	無助詞	＝*ba*	＝*ju*	計
数	78	177	60	315
割合	約25％	約57％	約18％	

この表 2 から見てとれるように、無助詞、＝*ba*、＝*ju* の後になにも後接しないものだけを比べてみたとしても、無助詞の割合は約25％である。やはり、談話資料から見た場合、黒島方言においては無助詞が基本であるとは言い難いと思われる。

さらに、無助詞の例の統語的環境が限定されていることを示す（25c）。すなわち、目的語が無助詞になる場合、目的語と動詞が隣接している場合がほとんどである、ということである。＝*ba* と＝*ju* の場合と比較してみよう。

表 3　無助詞、＝*ba*、＝*ju* ごとの隣接と非隣接の数と割合

	無助詞		＝*ba*		＝*ju*	
	隣接	非隣接	隣接	非隣接	隣接	非隣接
数	71	7	160	17	37	23
割合	約91％	約 9 ％	約90％	約10％	約62％	約38％

上の表 3 から明らかであるように、無助詞と＝*ba* においては圧倒的に目的語と動詞が隣接している場合が多い。すなわち、無助詞の場合は、目的語と動詞が隣接している場合が約91％、＝*ba* の場合は約90％であるのに対し、＝*ju* の場合は約62％という結果であった。

さらに、無助詞の場合の非隣接の例を詳しく見ると、特殊な例があることが分かる。次に示すとおり、7 例の無助詞かつ非隣接の例のうち、2 例が、*ti izu munu*「というもの」で終わる名詞句が目的語になっている例であった。

(26)　*juubinkoo＝ti*　　*iz-u*　　*munu*　　*mee*　　*duu＝si*
　　郵便局＝quot　　言う-npst　　もの　　fil　　自分＝inst
　　sukur-aba＝du　　*nar-u*
　　作る-cond＝foc　　なる-npst
　　「郵便局というものは自分で作らなければならない」

(27) *aamur = ti*　*iz-u*　*munu*　*mee*　*duu = si = du*　*mar-as-i*
泡盛 = quot　言う-npst　もの　fil　自分 = inst = foc　生まれる-caus-indf
「泡盛といういうものは自分で作り」

この *ti izu munu*「というもの」という表現は、現在のところまだ考察が進んでおらず、詳細不明のためこれらの例を無助詞に含めているが、ある種の主題の標示であると考えられる。したがって、他の主題の標示などと同様の扱いをした方がいいように思われる。

また、残る5例のうちの2例は、*mee* というフィラーだけが挿入されていただけであった。以下に例を示す。なお、上に示した(26)と(27)も *mee* が挿入されている。この *mee* の機能についても未詳であるため、今後の課題としたい。

(28) *kikai*　*mee*　*maas-i*
機械　fil　回す-indf
「機械を回して」

(29) *manuma = hara*　*unu*　*kutu*　*mee*　*bass-unsukun*
今 = abl　この　こと　fil　忘れる-neg.seq
「今からこのことを忘れずに」

残る、無助詞かつ非隣接の3例を以下に挙げる。これらは今のところ例外として考えているが、(30)については目的語の *usi*「牛」のあとに1秒程度のポーズがあるため、その影響かとも考えられる。

(30) *usi*　*zuuto*　*ara-u = wara*
牛　ずっと　洗う-npst = sf
「牛をずっと洗うよね」

(31) *icimanen*　*bun*　*ha-uta*　*munu*　*gosenen*　*bun*　*ha-iti*
一万円　分　買う-pst　もの　五千円　分　買う-seq
「一万円分買ったものを五千円分買って」

(32) *uri*　*manuma*　*hanga-ika*
それ　今　考える-cond
「それを今考えると」

以上、示してきたとおり、無助詞は目的語と動詞が隣接している場合にほぼ限定されていることがわかる。ただ、= *ba* のほうも動詞と隣接する割合が約90%と極めて高く、無

助詞との類似性が窺われる。この点についても今後の課題としたい。ただし、＝*ba* のほうは以下の例のように、ただフィラー等が挿入されただけとは言えない例も見られ、性質上の差異があるようではある。

(33) *mai＝nu* *ubon＝ba* *pusukku* *in＝ha* *batas-i*
米＝gen おにぎり＝ba 一個 犬＝all 渡す-indf
「おにぎりを一つ犬に渡し」

(34) *pompu＝ba* *mata* *iibaa* *ha-i* *kiti*
ポンプ＝ba また いい具合に 買う-indf 来る.seq
「ポンプをまたいい具合に買って来て」

(35) *uri＝ba* *biaha* *mazi* *sii*
それ＝ba 私たち まず する.indf
「それを私たちはまずして」

ここで、試みに、本研究の結果を２．２節の先行研究でとりあげられた方言と対照する。宮良（1995）は上にも述べたとおり、石垣島中心部（四箇字）の方言を対象としたものであるが、その四箇字のうちのひとつである登野城の談話資料が国立国語研究所のホームページで公開されている（Celik and Kibe 2019）。この３つの談話資料（「八重山の芸能」「台風の話」「日照りの話」）にあらわれる目的語の標示と比べてみよう。なお、石垣島中心部の方言は宮良（1995：174）において「「対格」を欠いて」おり、「目的語に後置された-yu や-ba は格標示とは無関係で、単に先行する名詞を強調する機能を持ち、随意的な要素である」とされている方言である。

表４　黒島と登野城の比較

		無助詞	＝*ba*	＝*ju*	計
黒島	数	78	177	60	315
	割合	約25％	約57％	約18％	
登野城	数	36	1	12	49
	割合	約73％	約２％	約24％	

登野城のサンプル数が少ないが、黒島と登野城が異なった傾向を示すことは上の表から読み取れる。黒島の無助詞の割合が25％程度であるのに対し、登野城の無助詞の割合は73％程度である。しかも、登野城の談話において＝*ju* が12回使用されているが、このうち９

回は３種類ある談話資料のうちの１つ（「八重山の芸能」）において用いられているものである。その談話について国立国語研究所のホームページには「方言サロンでの談話で、八重山芸能の良さについて語られたものです」と示されており、日常会話ではなく、聴衆に向かって話をするような場面の録音であったように思われる。このようなスタイルであったために＝*ju* の使用が増えた可能性がある。このことも併せて考えると、宮良（1995）が指摘するように、登野城を含む石垣島中心部の方言においては「目的語標示は無助詞が基本」ということが談話資料からも確認され、黒島方言との差異が際立って見える。

以上、見てきたように、八重山諸方言では目的語の無助詞が一般的であるようであるが、黒島方言はそのなかにあって無助詞が基本的ではないということが言える。

５．まとめと今後の課題

本論文では、黒島方言の談話資料を基に、以下の結論を得た。

㊱　本研究の結論（㉕再掲）

ａ．中松（1976）の指摘する「wa(R)」は観察されなかった。

ｂ．黒島方言の目的語の標示は無助詞が基本であるとは言えない。

ｃ．目的語が無助詞になる場合は、目的語と動詞が隣接する場合にほぼ限られる。

これらのうち（36b）は黒島方言の八重山語のなかでの特異性を示すものとして注目すべきである。八重山語はこれまで述べてきたとおり目的語が基本的には無助詞であるとする方言が多いが、一方、近隣の宮古語に目を向けると、様相が異なる。下地（2018：269-272）によると、宮古語伊良部島方言はわずかな例外を除いて「項が徹底的に格標示される（同書：269）」。つまり、黒島方言を除けば、八重山語は無助詞が一般的、宮古語は徹底して助詞が標示される、という極端な状況であると言える。本研究の結果はここに新たなデータを提供したわけであるが、その位置づけについては今後検討していきたい。特に、主語標示との関連も併せて検討する必要がある。

１節でも述べたとおり、本研究はかなり複雑な様相を呈する黒島方言の格標示の解明の第一歩である。そのため、残された課題は多い。今回は無助詞目的語の場合を取り上げたが、＝*ba* が続く場合と＝*ju* が続く場合の差異についてはまったく触れられなかった。今後、検討しなければならない。本研究で明らかになったように、黒島方言においては無助

詞は動詞と目的語が隣接している場合にほぼ限られるため、むしろ＝*ba* と＝*ju* との交替が目的語標示の交替としては重要であると思われる。つまり、「無助詞／有形の助詞」という非対称的な交替ではなく、「有形の助詞／有形の助詞」という対称的な交替の一種ととらえるのが適切であるように思われる。格標示の対称的な交替と非対称的な交替の間に性質上の差異があるか、という点については議論があるところであるが（Witzlack-Makarevich and Seržant 2018：23）、黒島方言および八重山諸方言の格標示パターンの解明がこの議論に貢献することは間違いない。

また、3節で述べたように、自動詞の主語名詞句に続く＝*ba* があること（(21)を参照のこと）も今後考慮しなければならない。このような現象は他の八重山諸方言でも多く報告されている（たとえばLawrence 2012：386、伊豆山 2002：360-361）。ただ、黒島方言の談話資料中には3例しか出現しなかった。さらに、いずれの例も *nz*「出る」が述部であり、かなり限定されているように思われる。一方、エリシテーション調査を行うと、*nz*「出る」以外にも、自動詞主語に＝*ba* をとる例文が許容されることもある。これらの現象も含め、八重山語のみならずより広い範囲での対照を行うことによって、琉球諸語の格・とりたてに関する理解が深まることと思われる。

参考文献

伊豆山敦子（2002）「琉球・八重山（石垣宮良）方言の文法」真田信治（編）『環太平洋の「消滅に瀕した言語」にかんする緊急調査研究消滅に瀕した方言語法の緊急調査研究（１）』，343-461．大阪：大阪学院大学.

占部由子（2018）「南琉球八重山語西表船浮方言の文法概説」修士論文（九州大学）https://www.academia.edu/36976341/%E5%8D%97%E7%90%89%E7%90%83%E5%85%AB%E9%87%8D%E5%B1%B1%E8%AA%9E%E8%A5%BF%E8%A1%A8%E5%B3%B6%E8%88%B9%E6%B5%AE%E6%96%B9%E8%A8%80%E3%81%AE%E6%96%87%E6%B3%95%E6%A6%82%E8%AA%AC.pdf

金田章宏（2009）「沖縄西表島（祖納）方言の格ととりたての意味用法」『琉球の方言』33，19-63．法政大学.

木部暢子（2019）「対格標示形式の地域差－無助詞形をめぐって－」『東京外国語大学日本学研究報告』５，20-32．東京外国語大学大学院国際日本学研究院.

古賀裕章（2015）「DOM（示差的目的語標示）」斎藤純男・田口善久・西村義樹（編）『明解言語学辞典』，157．東京：三省堂.

下地理則（2018）『シリーズ記述文法１　南琉球語伊良部島方言』東京：くろしお出版.

中川奈津子・タイラーラウ・田窪行則（2016）「八重山語白保方言の文法概説」狩俣繁久（編）『琉球諸語記述文法Ⅱ』，１-60．沖縄：琉球大学.

中松竹雄（(1976（2001)）「八重山方言の文法－竹富町黒島方言の助詞の形態と用法－」井上史雄・篠崎晃一・小林隆・大西拓一郎（編）（2001）『日本列島方言叢書34琉球方言考７先島（宮古・八重山他）』，398-409（338-349）．東京：ゆまに書房.

西岡敏・小川晋史（2011）「竹富方言の音韻・文法概説」前新透『竹富方言辞典』，１-63．石垣：南山舎.

野原三義（1999）「八重山竹富町小浜方言の助詞（１）」『八重山、竹富町調査報告書』１，９-24．沖縄国際大学南島文化研究所.

_____（2001）「八重山竹富町黒島方言の助詞」『八重山、竹富町調査報告書』３，87-111．沖縄国際大学南島文化研究所.

原田走一郎（2012）「南琉球八重山黒島方言における主題標識の二重使用の機能について」『日本言語学会第145回大会予稿集』，82-87.

_____（2016a）「南琉球八重山黒島方言の文法」博士論文（大阪大学）https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/55692/

_____（2016b）「談話から見る黒島方言の格標示」国立国語研究所「日本の消滅危機言語・方言の記録とドキュメンテーションの作成」研究発表会発表資料.

松田謙次郎（2000）「東京方言格助詞「を」の使用に関わる言語的諸要因の数量的検証」『国語学』51（１），61-76．国語学会.

宮良信詳（1995）『南琉球・八重山石垣方言の文法』東京：くろしお出版.

Aso, Reiko (2010) Hateruma. In Shimoji, Michinori and Thomas Pellard (eds.), *An Introduction to Ryukyuan Languages*, 189-228. Tokyo: ILCAA TUFS. (https://lingdy.aa-ken.jp/wp-content/uploads/2011/07/2015-papers-and-presentations-An_introduction_to_Ryukyuan_languages.pdf)

Celik, Kenan and Nobuko Kibe (2019) Raising language diversity awareness in Japan through web-based open access application. ICLDC 6 University of Hawai'i at Manoa. (https://kikigengo.ninjal.ac.jp/index.html)　2021年10月２日アクセス

Lawrence, Wayne (2012) Southern Ryukyuan. In Nicolas Tranter (ed.), *Languages of Japan and Korea*, 381-411. London: Routledge.

Malchukov, Andrej and Peter de Swart (2009) Differential case marking and actancy variations. In Andrej Malchukov and Andrew Spencer (eds.), *The Oxford handbook of case*, 338-355. Oxford: Oxford University Press.

Witzlack-Makarevich, Alena and Ilja A. Seržant (2018) Differential argument marking: Patterns of variation. In Seržant, Ilja A. and Alena Witzlack-Makarevich (eds.), *Diachrony of differential argument marking*, 1-40. Berlin: Language Science Press.

略号一覧

-	接辞境界	fil	フィラー	nom	主格
=	接語境界	foc	焦点	npst	非過去
abl	奪格	gen	属格	pst	過去
all	向格	imp	命令	quot	引用
caus	使役	inst	具格	seq	中止
cond	条件	indf	不定	sf	終助詞
decl	終止	loc	場所格		
disc	談話標識	neg	否定		

付記

黒島の方々に心から感謝を申し上げます。シカイットゥ　プコラサユー。

本研究は科研費17K13470、20K13051、19H01255の助成を受けました。また、国立国語

研究所「日本の消滅危機言語・方言の記録とドキュメンテーションの作成」プロジェクトの2016年度の発表を基にしています。その場でコメントをくださった方々に感謝いたします。

最後に、２名の査読者から貴重な意見を頂戴しました。記して感謝の意を表します。